献呈のことば

キリスト教と文化研究センター長　　木ノ脇悦郎

今年度より『関西学院大学キリスト教と文化研究』と名称を変更した本誌の最初の号を、３月末を持って定年退職される湯木洋一教授に献呈することになりました。これは、先生をお送りするに際して本当に相応しいことであると思われます。先生は本研究センターが1997年に発足して以来、一貫して主任研究員を努められ、まだ生まれたばかりの新しい研究センターの定着とその発展のために常に心を砕かれたばかりでなく、関西学院キリスト教主義教育研究室の最後の室長として、学院における重要なキリスト教教育研究を長年にわたって担ってきた機構の後始末をもされ、そこで蓄積された課題を新しい研究センターがいかに継承していくべきか提言し続けてこられました。

先生が長年にわたって専門とされた領域である実践神学、中でもキリスト教教育の分野は学問としての専門性はもとより、キリスト教主義学校が常に問い直し、立ち返り、新しい出発点とすべき原理という重要な課題を常に抱えているものであったと考えられます。従って、自らの研究としてその内容を深め、問い続けると同時に、学校に関わりを持つ者達からその内容が問われるという二重の責務を負わされていたということが出来るでしょう。

これまでに発表された論考を見渡してみますと、私達は上に述べたような課題と責務に誠実に応えようと努力し続けられた先生の足跡に容易に出会うことが出来るのではないでしょうか。その第一は、聖書のテキストと教育の関わりについての神学的考察であり、第二は教育と宗教、特にキリスト教の関係についての歴史的考察です。この問題については、日本近代化と教育の問題という優れて現代的な課題とも精力的に取り組んでこられた跡が残されています。そ

して、第三には教育現場としての学校、教会等についての原理的考察をあげる事が出来ます。

さらに、近年は学長補佐として、特に関西学院大学の人権教育のために尊い働きを努められ、大学宗教主事、関西学院キリスト教主義教育研究室長としてキリスト教主義教育の実質化、活性化のためにも心血を注いでこられました。また、あの阪神淡路大震災の後はボランティア活動の組織化、活動の継続のためにも多くの時間を割いてこられた事は周知の事実です。

このような研究と大学における様々な役職で多忙な毎日を過ごしておられたにもかかわらず、常に笑顔を絶やさず温厚な姿勢で多くの人々と接しておられた事も私達の印象に強く刻み付けられております。教育と研究の積み重ねの中で形成された人格であるとすれば、これこそ私達後進が先生から無言のうちに教示されたこととして記憶すべきことであろうと思わざるを得ません。

多忙の故現在まで、先に紹介した課題を全体として体系付け、一書として纏められることはありませんでしたが、近い将来、私達は先生の研究と教育の集大成に出会えることを楽しみにし、それをもって私達の指針ともしたいと強く願っております。これからも、元気で私達後進の指導をして頂けることを期待し、惜別の情絶ち難いものがありますが、衷心からの感謝をもって献呈の辞といたします。